

かささぎ 通信 第89号

毎月第2金曜日 13:30~15:30

2020年 2月 14日 発行

刈谷市中央図書館研修室 参加自由

森三郎刈谷市民の会「森三郎の作品を読む会」

二〇二〇年一月の「森三郎の作品を読む会」では
『森三郎童話選集夜長物語』（一九九六年、刈谷市教育委員会
所収の「副級長」「だだっ子」を読みました。

「副級長」（初出、『赤い鳥』一九三三年九月号）は、「かささぎ通信」第35号でも紹介しましたが、六年生の克巳の日常を描いた作品です。ある日、皆のいたずらに怒った竹林先生が授業を始めないで職員室に戻ってしまいました。級長の永田君と副級長の克巳が謝りに行って、先生はやつと許してくれます。克巳は自分たち二人のおかげで皆が許されたと思うと愉快でなりません。皆より偉いんだと気が強くなり、学校の帰りに友達を誘って、中学生の従兄に教わった危険な遊びをしてしまいます。汽車のレールの上へ五寸釘を置いて汽車が通り過ぎた後、ちゃんこになった薄い鉄を拾うのです。でも、すぐ後に通り過ぎた汽車の機関士が「危ないぞ」と警告するように投げつけた石炭が額に当たって、克巳はそれまでの得意な気持ちが一気に後悔の気持ちに変わります。とぼとぼと帰る克巳達の横を竹林先生がにっこり笑って自転車でも通り過ぎて行き、克巳はますます馬鹿なことをしたとたまらない気持ちになります。「自分はいらないでも何でもなく、ただ運がよくて副級長にさせてもらってでもいるような、恥ずかしい気持ちさえわいてきました」という最後の一文が「副級長」という題名の意味をよく示しています。

皆で読んだ後しばらく、事故にならなくて良かったという思いの間があり、似たような危険な体験をした子供時代の回想譚も出ました。大正13年4月27日の「名古屋新聞」に「線路に石をならべてはいかん」という見出しの、繰り返される列車妨害の恐ろしさを警告し、教科書挿入の実現を交渉しているという鉄道省の記事が載っていました。

「だだっ子」（初出、筆名村井安男、『赤い鳥』一九三三年三月号）は、正男のお父さんが番頭をしていた呉服屋「井筒屋」の一人息子良さんとの尋常小学校の頃の思い出話です。良さんは正男と同年で、赤ん坊の時に母さんが亡くなり、おばあさんに甘やかされて育った子でした。良さんが正男に対して身勝手な行動を取る度に、正男は何度も悔しい思いをしながら我慢をしてきました。その中の三年生と四年生の時のエピソードが語られています。二つの場面とも主人と使用人という大人の立場が子どもにも反映されていて、「読む会」では「理不尽だ」「おばあさんの猫かわいがりの育て方は良さんをだめにする」など義憤に駆られた読後の感想が出て、ひとしきり子育て論議に花が咲きました。

三年生の時のエピソードは写生の時間に使うクレヨンにまつわる話です。東京の大学に通う良さんのおじさんがお土産にくれた十六色のクレヨンを正男はまだ使わずに大切にしていたのに、良さんに貸してと言われて黙って渡すと、ボキボキ折って乱暴に扱ったクレヨンが返ってきます。クレヨンについては十二色の王様クレヨンの話が新美南吉の「最後の胡弓弾き」（初出『哈爾濱日日新聞』一九三九年五月一七日〜二七日）に出ていることを「かささぎ通信」第29号でも紹介しましたが、一九三二年度、三年度以降使用の「尋常小学図画」の指導要領には一、二年で八色、三、四年では十三色のクレヨンを用いること、品質が優良で、経済的のものがよいということが書かれています（『近代日本教科書教授法資料集成第十巻』一九八三年、東京書籍）。十六色のクレヨンを貰った時の正男の喜びと、良さんから返してもらった時の落胆がよく分かります。

森三郎の「角兵衛獅子」（『赤い鳥』一九三四年四月号）にも、宿題の写生画をクレヨンで書く場面がありました。

次回「森三郎の作品を読む会」 二〇二〇年三月十三日（金）

午後一時半〜三時半

「銀作」（『森三郎童話選集 夜長物語』所収）